

# 第 4 章

## 「子どもの学習」へのかかわり

青柳 肇



# 1. 子どもの学習の様子

学校以外での総学習時間は学年とともに増加するが、家庭での学習日数は減少する。小学校中学年以降では、母親がよい成績だと評価している子どものほうが学習時間が長い傾向がある。

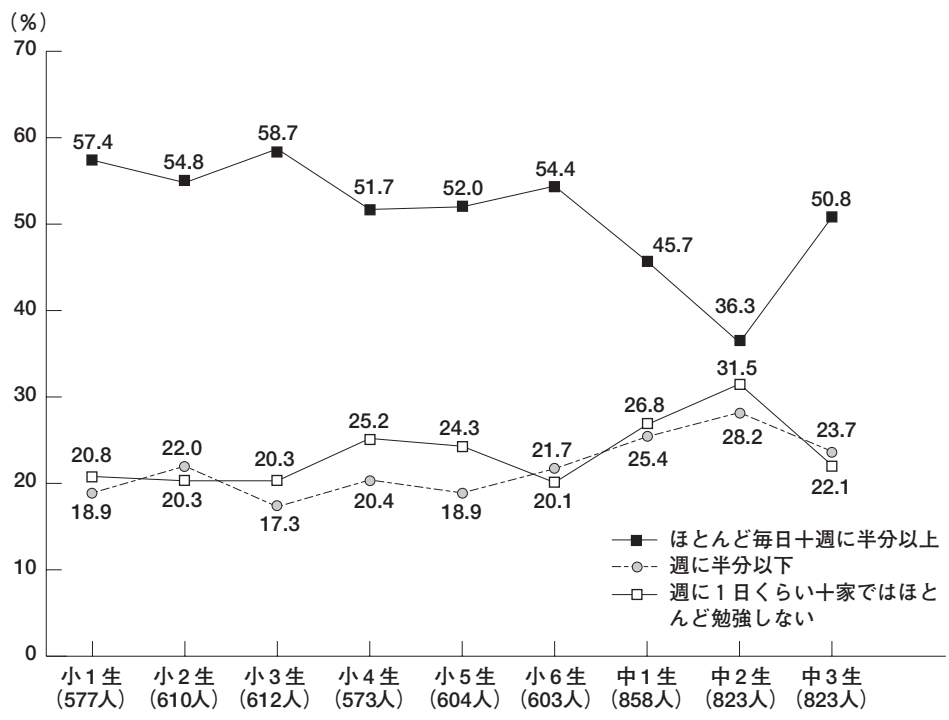
## 中1、中2生は家庭学習の日数が減少する

週あたりの家での学習日数は、「ほとんど毎日」と「週に半分以上」を合計すると、小学生の間は横ばいであるが、中1、中2生で減少する（図4-1）。中1生で50%を割るようになり、週に半分以上学習する割合が小学生より減少する。これは、家庭以外での、たとえば塾などでの学習が増加するためだと考えられる。一方で、中2生では家での学習時間のばらつきが生じ、この時期に個人差が生じていることがうかがえる。すなわち、「週に1日くらい」が約11%、「ほとんど毎日」が約17%、「家ではほとんど勉強しない」と「週に半分以上」がそれぞれ約20%、「週に半分以下」が約28%というように、特定の日に偏ることがなくなり、ばらつきが生まれる。この学年では受験を意識し始める者とそうでない者の分化が始まるのであろう。しかし、「週に1日くらい」と「家ではほとんど勉強しない」の合計は中2生を除くと大きな変化はみられず、およそ20~30%である。ただし、小学校低学年より中学生のほうが「週に1日くらい」が多いのは、先にも記したように、中学生では家庭外での学習が増えるからである。

## 学年が進むと1日の学習時間は長くなる

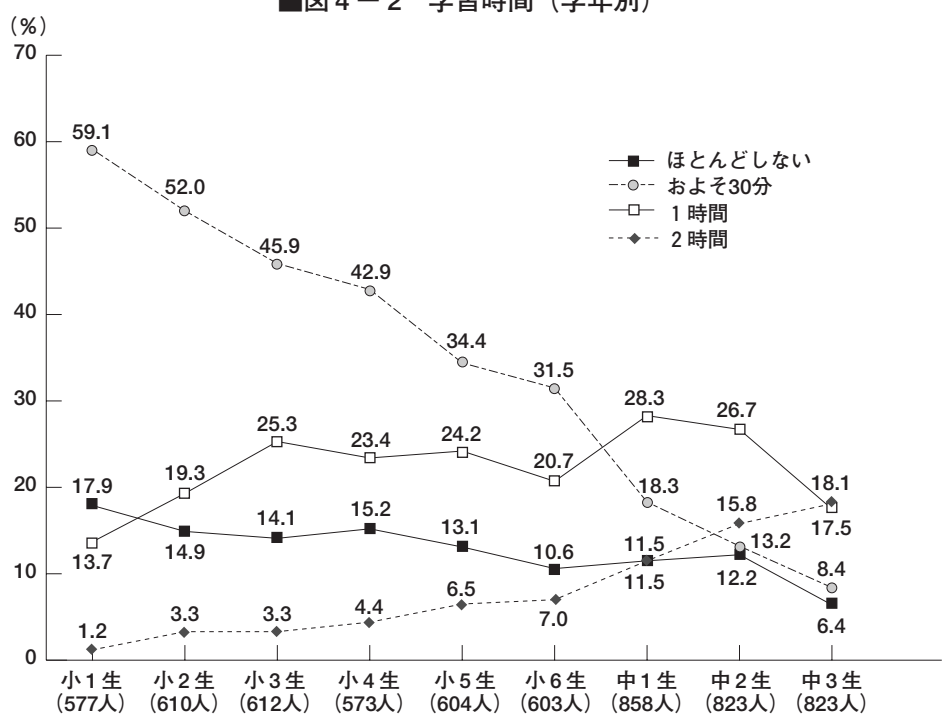
1日の学習時間（塾などで学習する時間も含む）を平均すると、小1生は約30分、小3生は約45分、小5生は約60分、中2生は約80分、中3生では約110分と、学年とともに増加していく。典型的な例であるので、「およそ30分」と「2時間」に注目すると、前者は学年とともに単純下降の、後者は緩やかな単純上昇の傾向がそれぞれあり、学習時間の増加傾向を端的に示している（図4-2）。しかし、個人差も大きくなる。小1生では「ほとんどしない」と「およそ30分」を合わせると77.0%を占め、「3時間」以上は0.5%しかない。それに対して、中3生では「3時間」以上が21.8%いるのに対して、「ほとんどしない」と「およそ30分」の合計は14.8%に減少する。平均的には学年が進むと学習時間は増えるが、同時に学年とともに学習時間がばらつくことが示された。もうひとつ特徴的なのが、中1、中2生では、「1時間」が最も多くなる。小学生の間は、最頻値は「およそ30分」である。このことは、生活のなかでの学習への重要性が子ども自身にも母親にも認識されるようになってくることのあらわれといえる。

■図4-1 学習日数(学年別)



注1) 学習日数は、学習塾や予備校での学習を除く。  
 注2) 無答不明は図から省略した。

■図4-2 学習時間(学年別)



注1) 学習時間は、学習塾や予備校、家庭教師について勉強する時間もすべて含む。  
 注2) 「1時間30分」「2時間30分」「3時間」「3時間30分」「それ以上」、無答不明は図から省略した。

## ■ 母親は子どもの学業成績を 過大評価する傾向がある

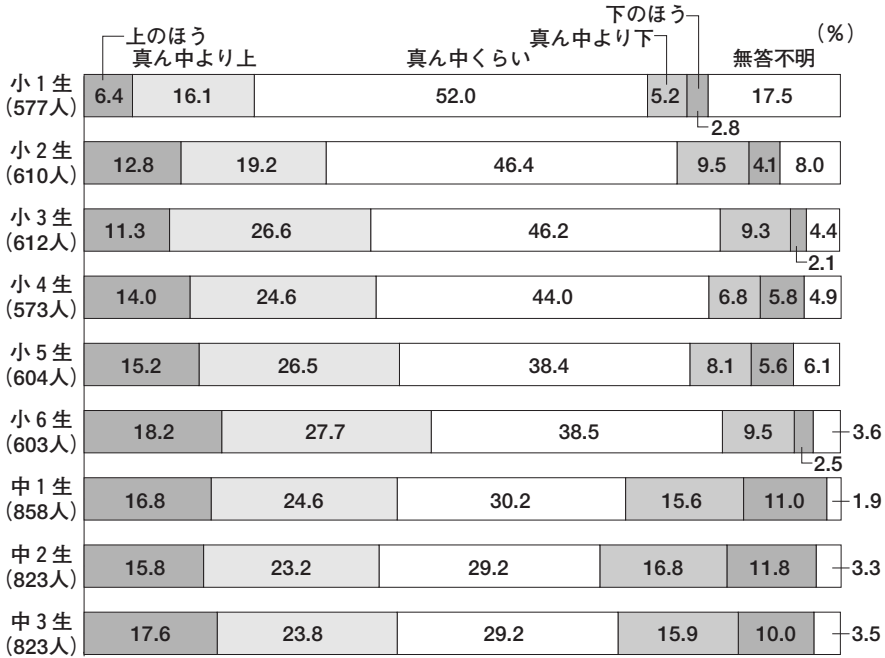
全体的に母親は、子どもの成績を過大評価する傾向がある（図4-3）。たとえば、「真ん中くらい」「真ん中より上」および「上のほう」と答えた母親を合計すると、小1生で74.5%、小2生78.4%、小3生84.1%、小4生82.6%、小5生80.1%、小6生84.4%、中1生71.6%、中2生68.2%、中3生70.6%である。これらは予想される数値よりかなり高い。小学校低学年では、母親は正確に子どもの成績を十分把握できないこと（小1生では、「無答不明」が17.5%ある）や中学・高校受験までに時間があることなどから学業成績へのこだわりがなかったり価値を置かないため、学業成績は普通であればよいといった考えがあると思われる。そのために「真ん中くらい」だけで50%を超えているのであろう。徐々にこの数値は減少するが、それに代わって「上のほう」と「真ん中より上」が増加していく。とくに、「上のほう」は小5生より上の学年では15%を超える。中3生ともなると17.6%になる。この値は、小6生とほぼ同じ数値であり、中学受験も含めて受験への母親の思い入れが加味されているといえる。一方、中学

生では、「真ん中より下」や「下のほう」も増えていき、中3生ではそれぞれ15.9%、10.0%になる。これらのことは、学年が進むと客観的になっていくためだともいえるが、それでも過大評価の傾向は強い。たとえば、中学生で「真ん中より下」と「下のほう」を合計すると、中1生は26.6%、中2生28.6%、中3生25.9%となり、予想される数値より低い。子どもの成績評価に希望的観測が入っているとと思われる。

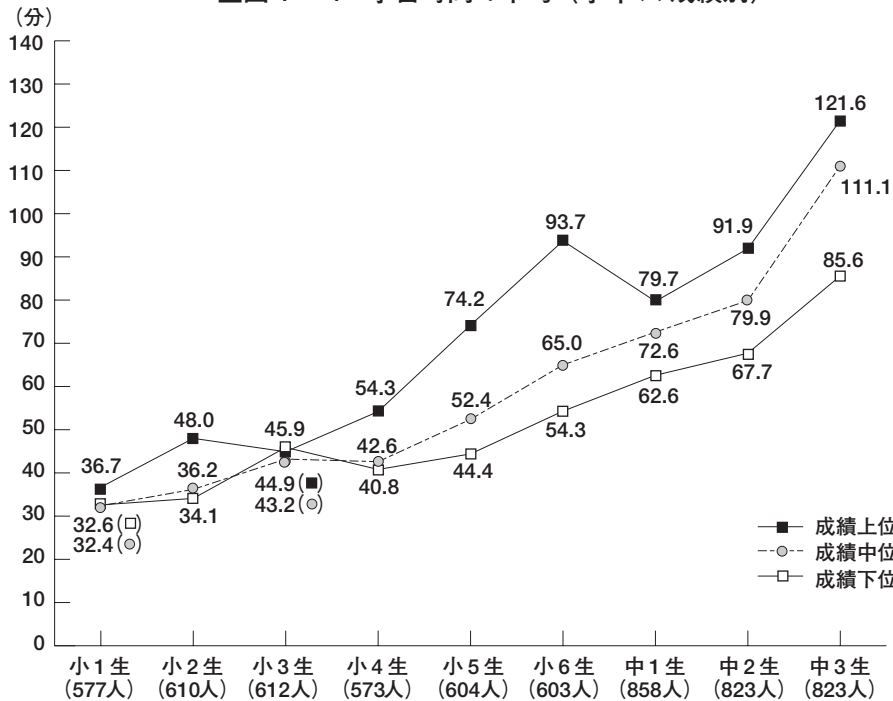
## ■ 母親の成績評価が高いほど 子どもの学習時間も長いと認識

小3生までは、成績評価と学習時間には関係がみられないが、小4生以降になると、成績が上位だと思っている母親は、子どもの学習時間も長いと思っている（図4-4）。しかし、このことは、実際の子どもの成績と実際の学習時間の関係ではないことに留意しなければならない。ともに母親による評価だからである。先に述べたように母親の成績評価は、過大視する傾向がある。このことは、学習時間の回答にもあてはまることであろう。しかし、この結果は、一応の目安として意味のあるものと考えてよい。

■図4-3 子どもの成績(学年別)



■図4-4 学習時間の平均(学年×成績別)



注1) 学習時間は、学習塾や予備校、家庭教師について勉強する時間もすべて含む。

注2) 学習時間の平均は、「ほとんどしない」0分、「およそ30分」30分、「1時間」「1時間30分」「2時間」「2時間30分」「3時間」「3時間30分」をそれぞれの時間、「それ以上」を240分として計算した。無答不明は母数から除外した。

注3) 子どもの学校の成績は、「上のほう」「真ん中より上」を成績上位、「真ん中くらい」を成績中位、「真ん中より下」「下のほう」を成績下位とした。

## 2. 子どもの学習に関してすること

子どもの学習に対する母親の関心は、中学生にいたるまで「勉強しなさい」という声かけの多さにあらわれている。ただし、学年が進み学習が高度になっていくと、声かけだけで実際に学習の内容を教えるなどのことは少なくなっていく。

子どもの学習に対する母親のかかわりに関しては質問項目数が多いので、ここでは、「学習で親が手伝うこと」「学習に関して励ますこと」「学習内容や学業成績のチェックに関すること」「教養を身につけさせること」に分けて検討する。

### 「学習で親が手伝うこと」は、 学年とともに減少する

この問題は、「学校の宿題を手伝う」「夏休みの宿題を手伝う」「子どもが勉強していて分からないところを教えてあげる」の質問で検討した。宿題関係の最初2つの質問と「子どもが勉強していて分からないところを教えてあげる」の質問の答えは、異なった値を示したので別々に検討する。

「学校の宿題を手伝う」(図4-5①)は、「夏休みの宿題を手伝う」と似た傾向を示す。ここでは、「学校の宿題を手伝う」のうち典型的なカーブを示す「ぜんぜんない」と「時々ある」に注目する。「ぜんぜんない」は、小1生が最も低く(16.6%)、学年が進行するとほぼ直線的に高くなっていき、中3生では最も高くなる(62.9%)。一方、「時々ある」は、小2生で最も高く(31.5%)、緩やかな下降であるが直線的に減少し、中3生で最も低くなる(7.4%)。「よくある」は、小1生から低い数値(18.2%)であり、小3生くらいから横ばいになり、中学生では、2%以下になる。

これらのことから、全般的に母親が宿題を手伝うことは少ないといえる。これは、出された宿題が少ないからということも考えられ、その点はこの資料からだけでは明確でな

い。ただ、学年が進むにつれて手伝うことは少なくなるとはいってよい。

一方、「子どもが勉強していて分からないところを教えてあげる」は、低学年では、「よくある」が最も多く、小1生では57.7%であるのが中3生では8.0%になるというように、学年とともに減少する(図4-5②)。また、「時々ある」は小6生までは徐々に増加し、小6生では60%近くまでになる。しかし、小6生を頂点に中学になると減少していき、中3生では、39.6%まで下降する。これは、子どもの学年が進むにつれて学習内容が高度になり母親は徐々に教えられなくなっていくことをあらわしているが、他方では小学生まではなんとか教えようとする気持ちがあることをあらわしている。このことは、「あまりない」と「ぜんぜんない」がともに低いところから始まり、緩やかに上昇していくことから示されている。宿題へのかかわりと普段の学習へのかかわりで異なった値を示しているのが、この数値からは母親が宿題より普段の学習にかかわることに価値を置いていることがうかがえる。

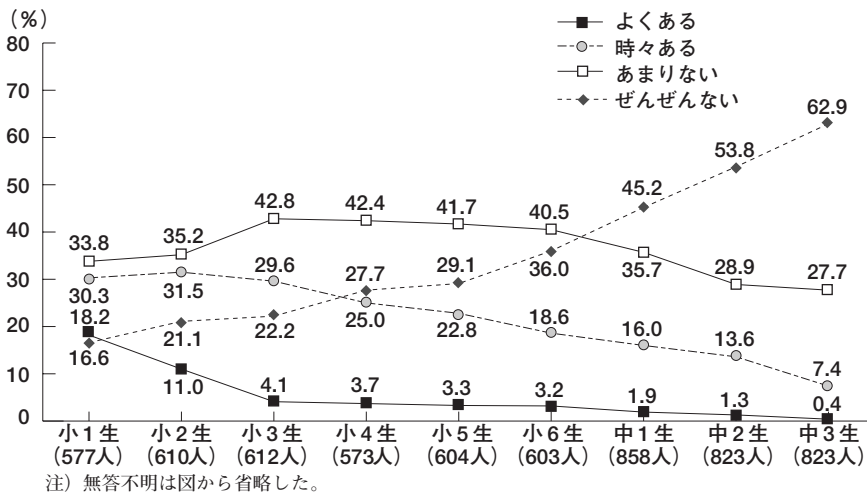
### 「学習に関して励ますこと」は、 学年を通じてよく行う

この問題は、「『勉強しなさい』と声をかける」の質問だけで検討する(図4-5③)。

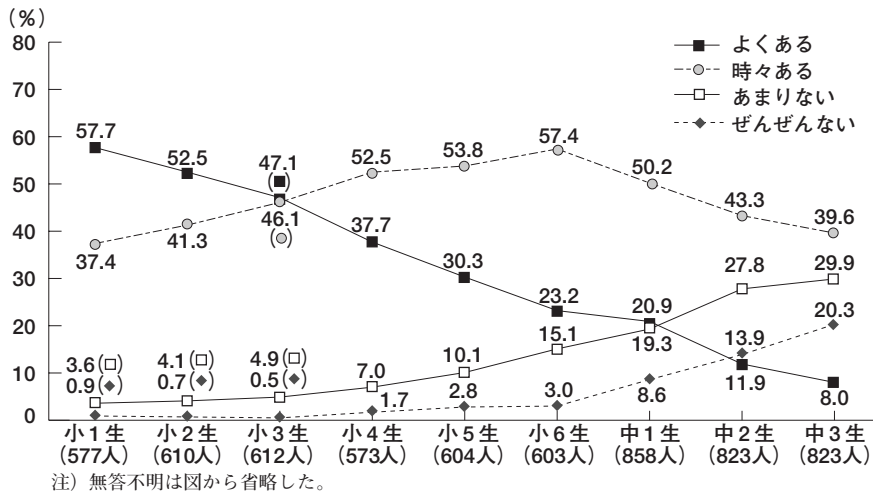
「『勉強しなさい』と声をかける」に関しては、「よくある」は、学年とともに減少していくが、「時々ある」は、小1生では41.8%であり、中3生では44.7%とほぼ横ばいといえ、年齢とともに減少することはない。「あまりない」と「ぜんぜんない」も小1生から

■図4-5 学習へのかかわり(学年別)

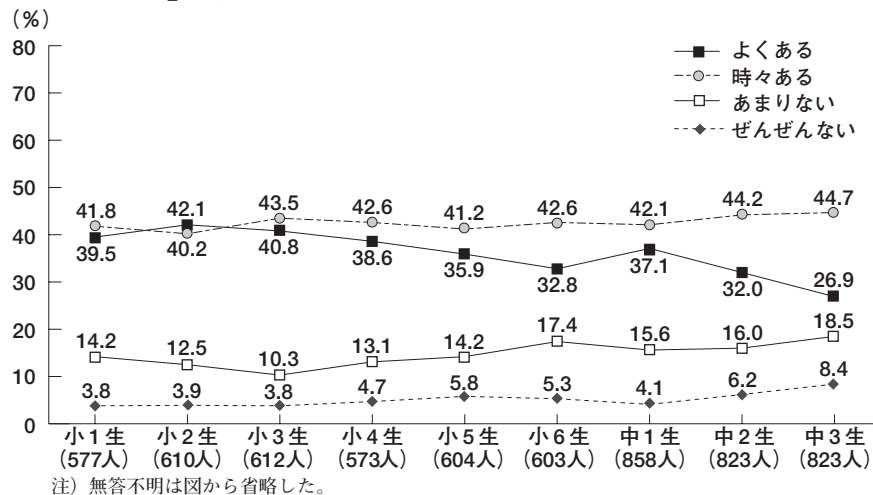
## ① 学校の宿題を手伝う



## ② 子どもが勉強していて分からないところを教えてあげる



## ③ 「勉強しなさい」と声をかける



中3生まで低いままほぼ横ばいである。これらのことから、母親は中学生になるまで子どもに「勉強しなさい」という声かけをよくするといえる。前にも述べたが、学年が進むと学習がむずかしくなるため、内容を教えることにかわって言葉かけが増えていくと考えられる。

### 成績のチェックは学年を通じて行っている

「学校のテストの点数を確認する」と「学校や塾のノートに目を通す」は、類似した内容の項目であるが、数値変化の様相はまったく異なる。

「学校のテストの点数を確認する」は、小1生で「よくある」がすでに63.6%あり、小6生まで緩やかに減少する(図4-5④)。しかしながら、中1生で57.3%になり、中3生まで高率のまま(50.9%)である。「よくある」と「時々ある」を合計すると小1生から中3生までは、一貫して80%以上あり、母親がテストの点数をよく確認していることを示している。

一方、「学校や塾のノートに目を通す」は、小1生では「よくある」が最も多く(42.6%)、学年とともに一貫して減少し、中3生では

3.4%になる(図4-5⑤)。一方、「ぜんぜんない」や「あまりない」は小1生では低率(それぞれ3.3%と14.7%)であるが、両者ともに学年が進むと上昇し、中3生では33.7%と41.8%になり、かなりの高率になる。これらのことは、先に述べたように、学年が上がると学習内容が高度になり、母親が理解できなくなってきたことを意味する。

### 「教養を身につけさせること」は、あまり関心を示さない

教養を身につけさせることについては、「美術館や博物館に連れて行く」と「アウトドアや自然体験の機会をつくる」で検討した。

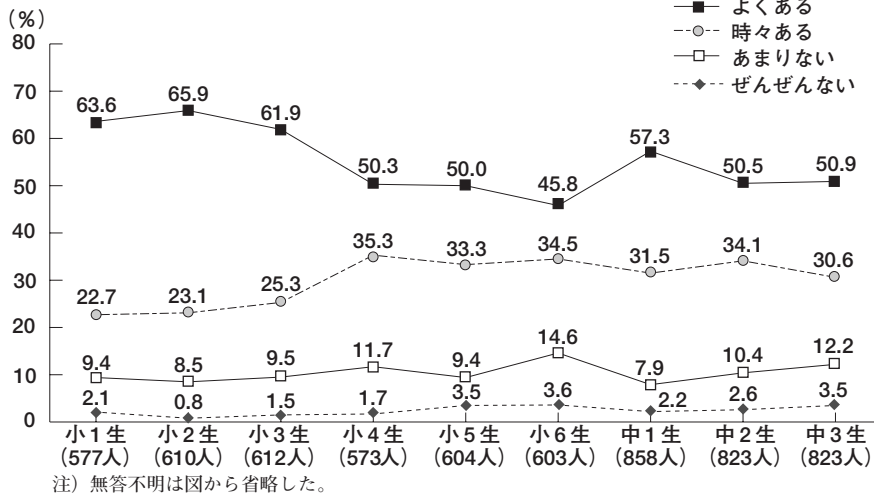
学習に関することでも直接受験に関係しない事象についての関心は低い。たとえば、「美術館や博物館に連れて行く」ことが「あまりない」という回答は、小1生以降30~40%前後で最も数値も高く、「よくある」は各学年とも10%以下で低率のままであり、選択肢のなかで最も数値が低い(図4-5⑥)。

アウトドア体験は、小学生の間は行うが、中学以降は急激に減少する。アウトドアは、遊びや娯楽の要素が強くなるためである。先にも述べたが、中学生以降では娯楽よりも学習に価値を置くためであろう。

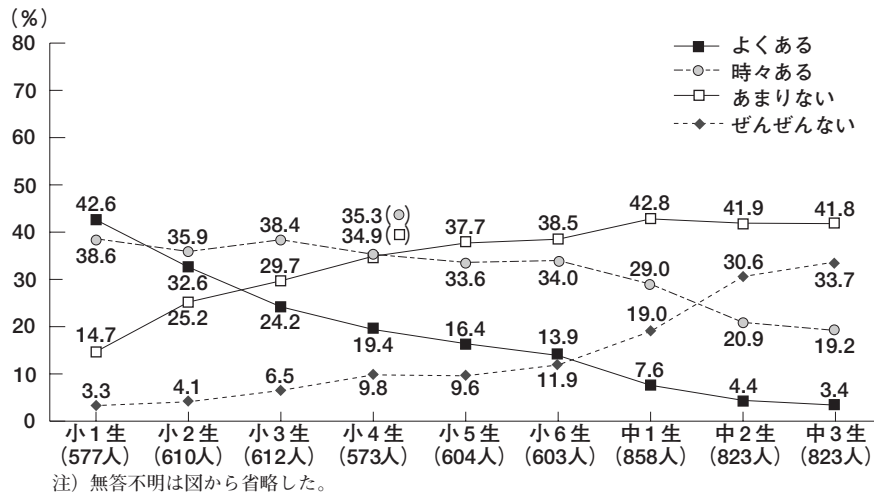


■図4-5 学習へのかかわり(学年別)

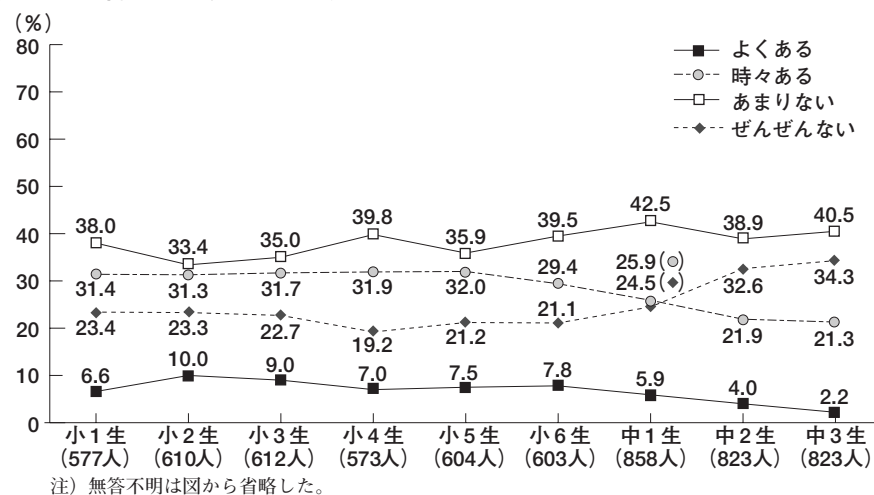
## ④ 学校のテストの点数を確認する



## ⑤ 学校や塾のノートに目を通す



## ⑥ 美術館や博物館に連れて行く



### 3. 学校の取り組みや指導の満足度

母親は、学習への態度や姿勢に対する指導を高く評価しているが、子どもの学力向上の指導には不満も多い。良好な友人関係を築くための指導は、小学校高学年では不満も増える。子どもの諸技能の習得は、満足とともに不満もある。

学校の取り組みについては、(1) 学業に関すること、(2) 友人関係に関すること、(3) 課外活動に関すること、(4) 子どもの心身の健康や人格形成に関すること、(5) 技能習得に関すること、(6) 親への対応に関することに分類される。そのそれぞれについて分析する。

まず、(1) 子どもの学業に関することについてであるが、ここでは大きく「学習への態度や姿勢」と「学力を伸ばすこと」の2つの側面から分析する。ここでいう「学習への態度や姿勢」とは、学力を伸ばすための指導そのものではなく、学習に向かう熱意に関する指導を意味する。一方、「学力を伸ばすこと」は、学習の内容に関する指導を意味する。

#### 「学習への態度や姿勢」は、 おおむね満足している

「学校に遅刻しないための指導」「忘れ物をしないための指導」「文房具や教科書を大切に使うよう教えること」「授業中に騒いだり、立ち歩いたりしないよう指導すること」については、いずれも全体の60%前後が「まあ満足している」と答えている。これらの項目に対する回答はほぼ同じ傾向にあるので、一例として「学校に遅刻しないための指導」を示しておく(図4-6①)。図からもわかるように、これらの満足感は、小1生から中3生まで学年による違いもほとんどみられない。

学業への態度のうち、世間一般で問題とされている学級崩壊に関して、これらのデータだけから考えてみよう。その指標の1つと考えられる「授業中に騒いだり、立ち歩いたり

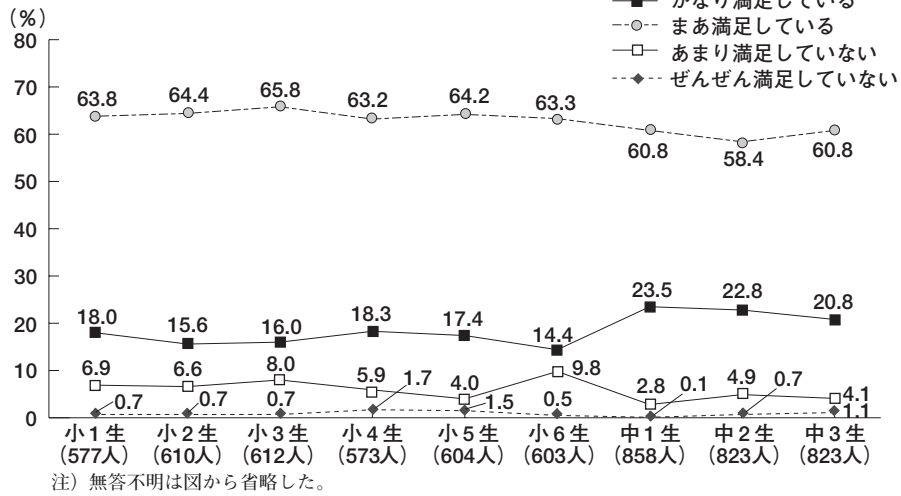
しないよう指導すること」も、「かなり満足している」と「まあ満足している」を加えるといずれの学年でも70~80%が満足していることになる。しかし、このことから、今回の調査校には学級崩壊がないと断定することはできない。一般に学級崩壊の資料は、各学校単位で「ある」「なし」を調べたものが多い。特定の学校の多数のクラスのなかの1クラスでもあれば、「ある」にカウントされる。クラス全体からみれば少なくとも、学校全体からみた割合は高くなるのである。本調査は、学級崩壊に特化して行われたものではない。したがって、この問題を深く検討するには、この問題に焦点を当てた別の調査で行う必要がある。

#### 「学力を伸ばすこと」には、 満足とともに不満も多い

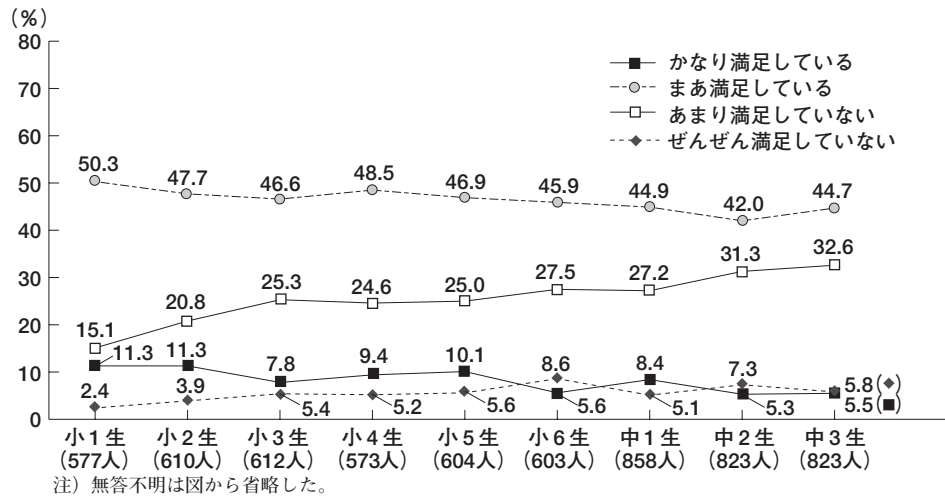
「家での勉強方法や学習時間についての指導」「宿題の内容や量」「教科の基礎的な学力をつけること」「中学受験・高校受験に役立つ学力をつけること」「子どもの学習進度や興味・関心にあった教え方をすること」(図4-6②)や「子どもの成績を客観的に正しくつけること」など学習内容の指導に関しては、「学習への態度や姿勢」への指導とは多少違ってくる。これらのことは、「中学受験・高校受験に役立つ学力をつけること」を除くと、「まあ満足している」がどの学年も40~60%程度あり、その数値は「学習への態度や姿勢」の項目と類似しているが、「あまり満足していない」の割合も高くなる。このことは、おおむね学年が進むと高くなる。前項目で示したように、親は子どもの学習に関

■図4-6 学校の取り組みへの満足度(学年別)

① 学校に遅刻しないための指導



② 子どもの学習進度や興味・関心にあった教え方をすること



心を寄せながらも、学習内容が高度になるために実際に教えるなどの援助ができなくなる。そのことに対する親の不安と、学校に対しての強い期待のあらわれとも考えられる。

### 「友人関係に関すること」は、小学校高学年での不満が緩やかに増す

友人関係に関する問題は、今回の調査では、「いじめ問題や友だち同士のトラブルへの対応」という質問だけである。したがって、この項目に関してだけコメントする。

図4-6③が示すように、「まあ満足している」は、小学校低学年から中学年にかけて54~58%程度であるが、小5、6生では減少していき、小6生では46.4%になる。それに対応して「あまり満足していない」も増加して22.2%に達し、「ぜんぜん満足していない」も7%に近くなる。これらのことは、いじめなどの問題が小学校の高学年で多くなることを示唆するものである。「悩みや気がかり」に関する質問項目で、子どもが「いじめられている」ことに悩んでいるという回答は、どの学年も5%以下であるが、それは個人の問題であり、学級全体の問題ではない。ここでは、学校や学級の問題であるので、「あまり満足していない」「ぜんぜん満足していない」の数値が個人の悩みの数値より高くなったと考えられる。

### 「課外活動に関すること」は、小学生の間は徐々に満足度が増加する

課外活動に関する項目も「行事や委員会活動、部活動・クラブ活動などを十分に行うこと」の質問だけである。「まあ満足している」は、小1生では39.0%であるが、学年が進むと増加し、小5生で65.9%、小6生で63.0%に達する(図4-6④)。課外活動は低学年では少なく、学年が進むと増えていくことを示すものである。また、この図では、「まあ満足している」が中学生で減少しているが、その分「かなり満足している」が増加しているので、合計すれば、満足度は高いといえる。

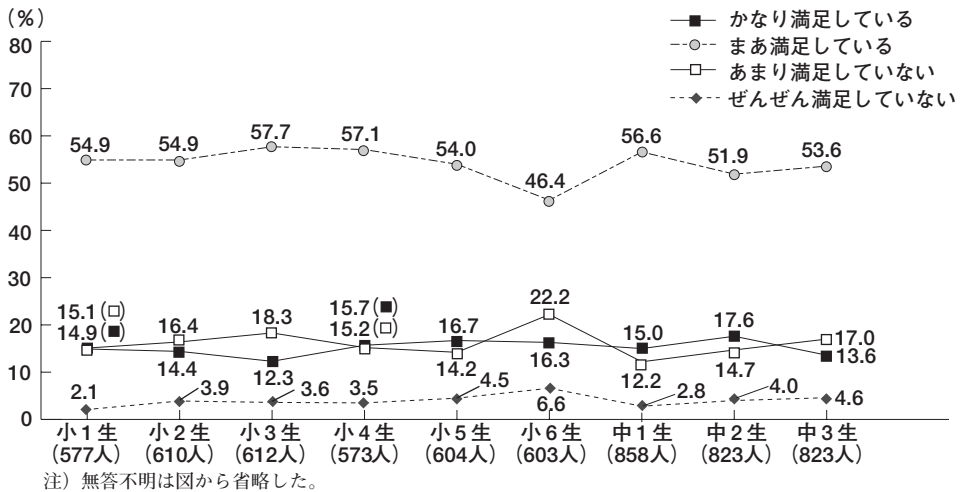
### 「子どもの心身の健康や人格形成に関すること」は、学年による差がない

心身の健康や人間形成に関することについては、「スポーツ能力や体力の向上」と「子どもが人間的に成長するのを助けること」で聞いている。

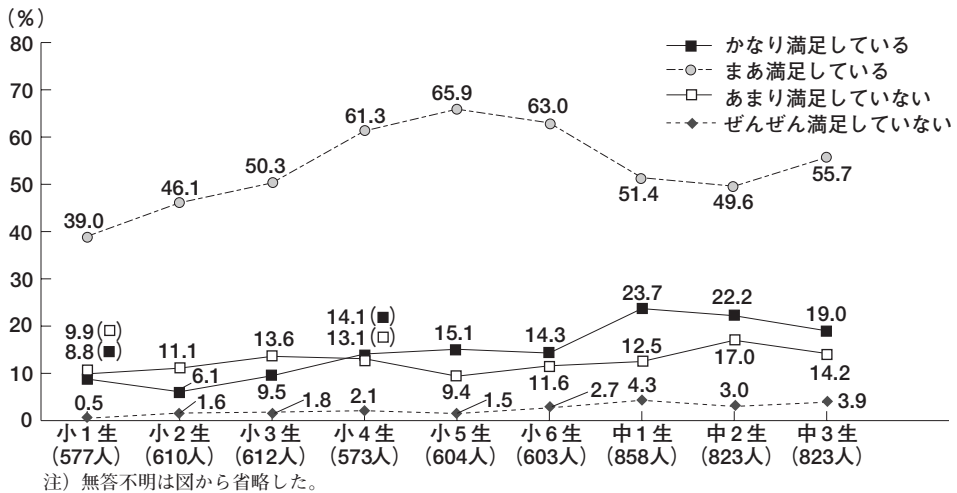
「まあ満足している」割合は、「スポーツ能力や体力の向上」が「人間的に成長するのを助けること」よりやや高いものの、ほぼ同じ傾向であり、いずれの学年も50%を超えている。ここでは、後者について例として示しておく(図4-6⑤)。この2項目は学年による差もほとんどみられない。人格形成や健康への指導は、家庭で行われることでもあり、また、母親自身が指導可能な分野であるのかもしれない。

■図4-6 学校の取り組みへの満足度(学年別)

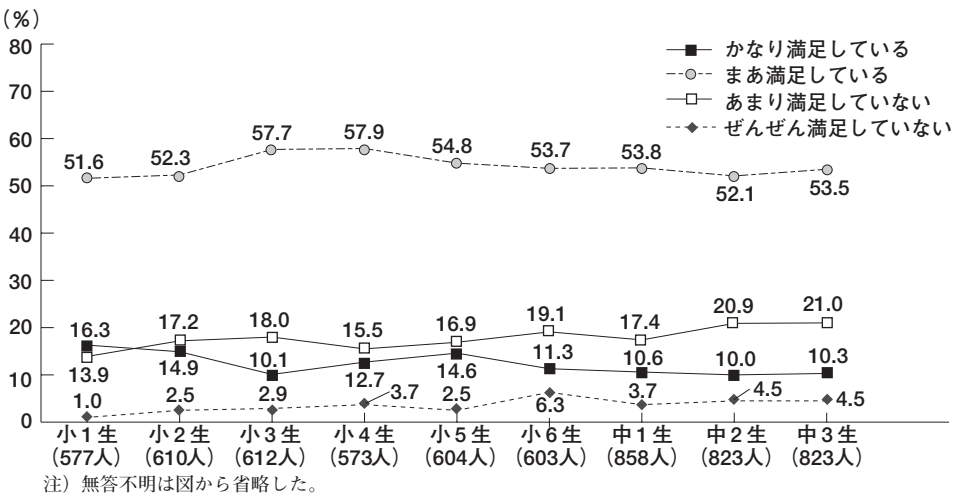
## ③ いじめ問題や友だち同士のトラブルへの対応



## ④ 行事や委員会活動、部活動・クラブ活動などを十分に行うこと



## ⑤ 子どもが人間的に成長するのを助けること



「技能習得に関すること」は、満足している面もあるが、不満も少なくない

技能習得に関することについては、「音楽・美術などの芸術面の才能を伸ばすこと」と「コンピュータを使う力をつけること」で聞いている。「コンピュータを使う力をつけること」については、小学校低学年の満足度はやや低い（「まあ満足している」が30%前後）が、他の学年では、「まあ満足している」がいずれの項目でも50%に近い。その一方で、「あまり満足していない」も比較的高く、学年によっては30%近くになる（図4-6⑥）。こうした技能は、母親では十分に指導できな

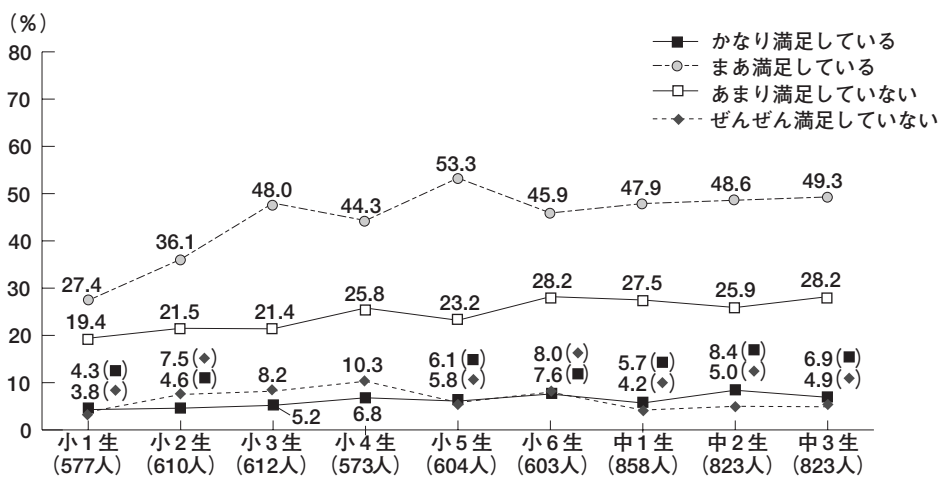
いことを反映しているのであろう。

「親への対応に関すること」は、学年が上がるとともに要求が高まる

親への対応については、「保護者が気軽に質問したり相談したりできること」と「学校の教育方針や教育活動の様子を保護者に伝えること」で聞いているが、単なる受け身でなく親が学校に相談できる場所であってほしいことがうかがわれる。「保護者が気軽に質問したり相談したりできること」について、中3生の母親は、約25%が「あまり満足していない」と回答している。

■図4-6 学校の取り組みへの満足度（学年別）

⑥コンピュータを使う力をつけること



注) 無答不明は図から省略した。